

〈2018 年度〉

# ism-Link の検証

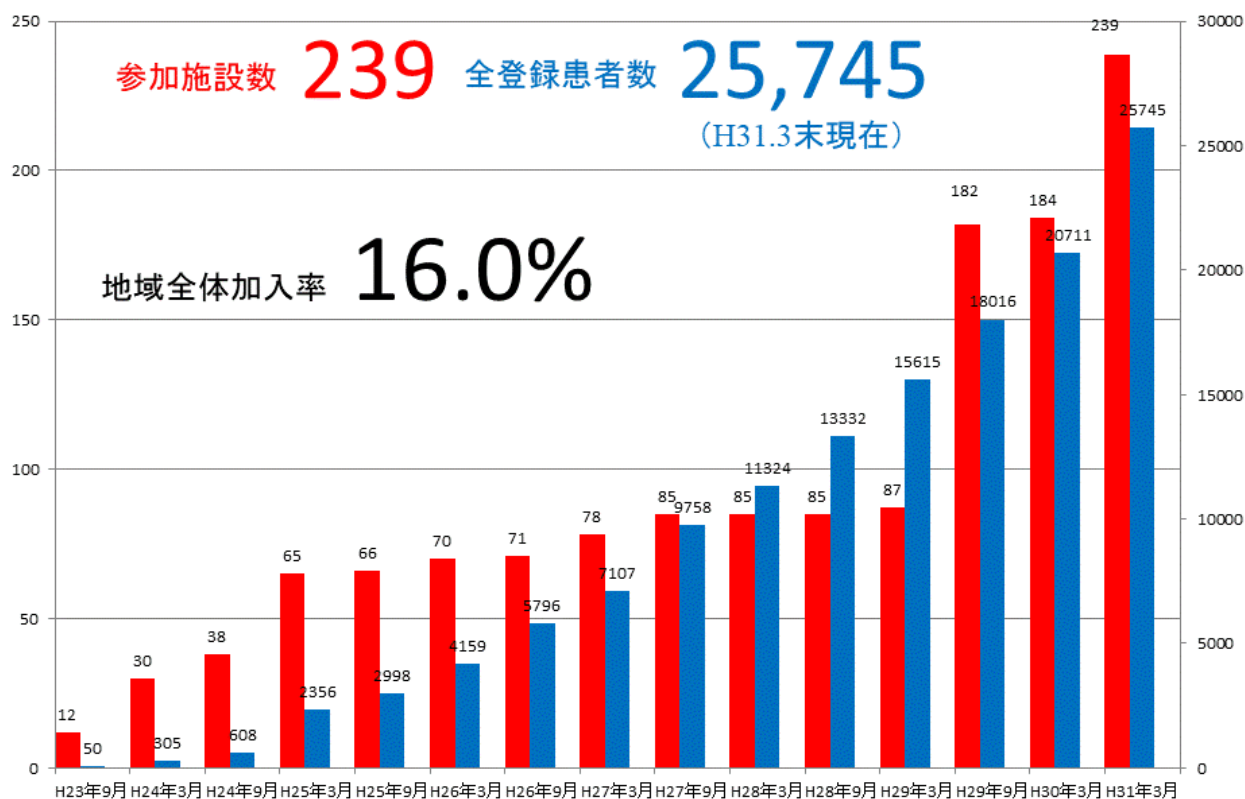
南信州在宅医療・介護連携推進協議会  
飯田下伊那診療情報連携システム運営小員会

医療と介護の連携において、円滑な情報共有は重要な課題の一つとなっている。飯田下伊那診療情報連携システム（ism-Link）は、2009年度に導入され、2011年12月に情報開示6病院を中心に運用を開始した。その後、システム更新を機に、2016年4月に南信州広域連合に事務局を設置し、南信州在宅医療・介護連携推進協議会の飯田下伊那診療情報連携システム運営小委員会において運用方法等の検討を行っている。その中で、次期システム更新（2021年3月）に向け、ism-Linkが当地域の医療・介護連携における「情報インフラ」として適切なシステムであるかどうかを検討するため、定期的にism-Linkの利活用の状況、医療・介護連携における効果等について検証作業を実施している。

	項目	検証に必要な主要データ	詳細
1	基本事項	参加医療・介護関係事業者数	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域全体の医療・介護関係事業者数把握（資源把握）</li> <li>・参加事業者数集計（全体/業種別）</li> <li>・参加率（地域全体/業種別）</li> </ul>
2	基本事項	ism-Linkに同意した住民の数	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域全体の登録患者数</li> </ul>
3	病病連携	病院間連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院間アクセス件数</li> <li>・地域連携パスでのism-Link登録患者数</li> <li>・その他転院時におけるism-Link登録患者数</li> </ul>
4	病診連携	病診間連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病⇒診アクセス件数</li> <li>・診⇒病アクセス件数</li> <li>・がん地域連携パスでのism-Link登録患者数</li> </ul>
5	多職種連携	医療介護連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連携シート作成数に対するism-Link登録患者数</li> <li>・診病介間アクセス件数</li> </ul>
6	情報共有項目	項目別閲覧状況	各項目 <sup>※1</sup> のアクセス件数 ※1 画像・検査・注射・処方・レポート・ファイル・ノート
7	利用者の意見	関係職種向けアンケート調査	利活用における課題を洗い出し、改善に向けた対策を講じるための材料とする。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・2016年度は医師・訪問看護師を対象とする。</li> <li>・2017年度以降は、関係する多職種を対象とする。</li> </ul>
8	診療報酬算定	算定件数	地域全体の算定件数 <ul style="list-style-type: none"> <li>・画像・検査情報提供加算 算定件数（200点/30点）</li> <li>・電子的診療情報評価料 算定件数（30点）</li> </ul>

検証項目 1・2

[ism-Link] 登録患者数・参加施設数の推移



施設	参加施設数	備考
病院	10	参加率 100%
診療所	68	参加率 65%
歯科診療所	24	参加率 29%
調剤薬局	59	参加率 93%
訪問看護ステーション	7※2	参加率 100% ※2 病院内の訪問看護ステーションが6事業所あり、当圏域の訪問看護ステーション全13事業所はすべて参加している。
介護関係事業所	66	参加率 54%
その他	2	圏域外の施設
合計	239	

## 検証項目 3～6

### (1) アクセス数の年次推移

図1 施設別アクセス数の年次推移

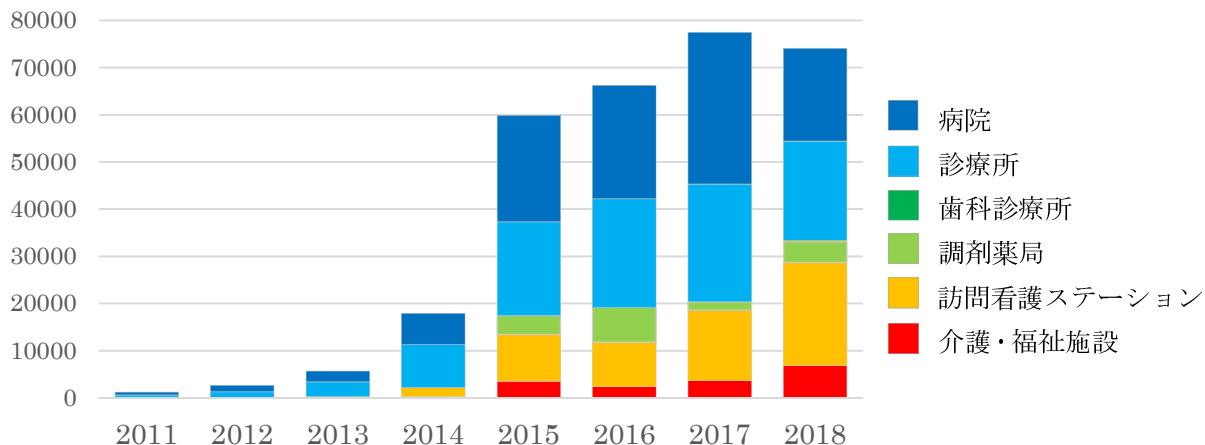


図2 職種別アクセス数の年次推移

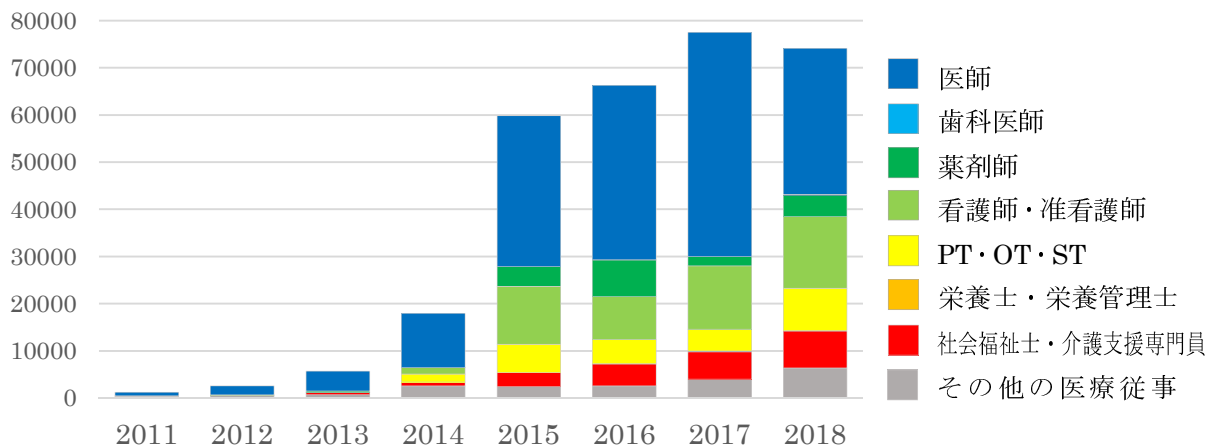
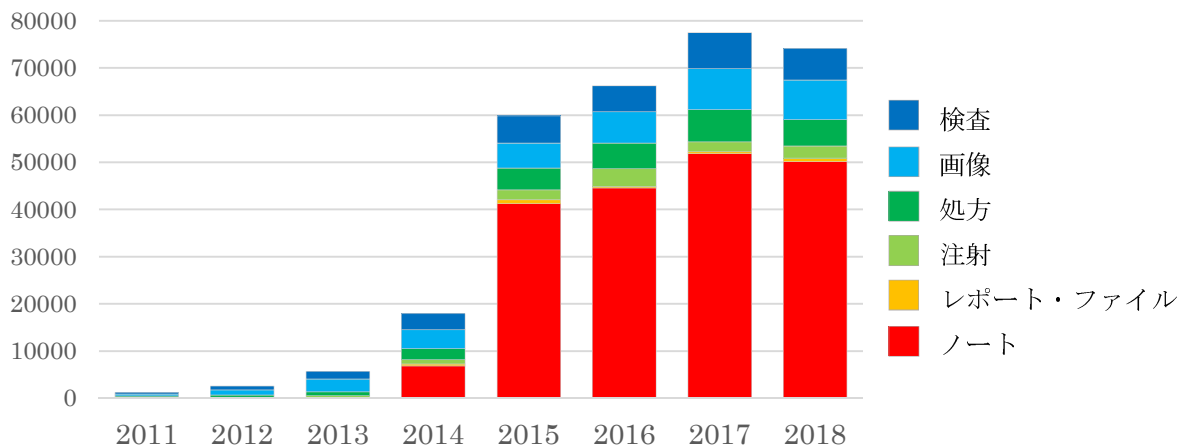


図3 項目別アクセス数の年次推移



(2) 施設別のアクセス状況

図4 病院の参照先・参照項目

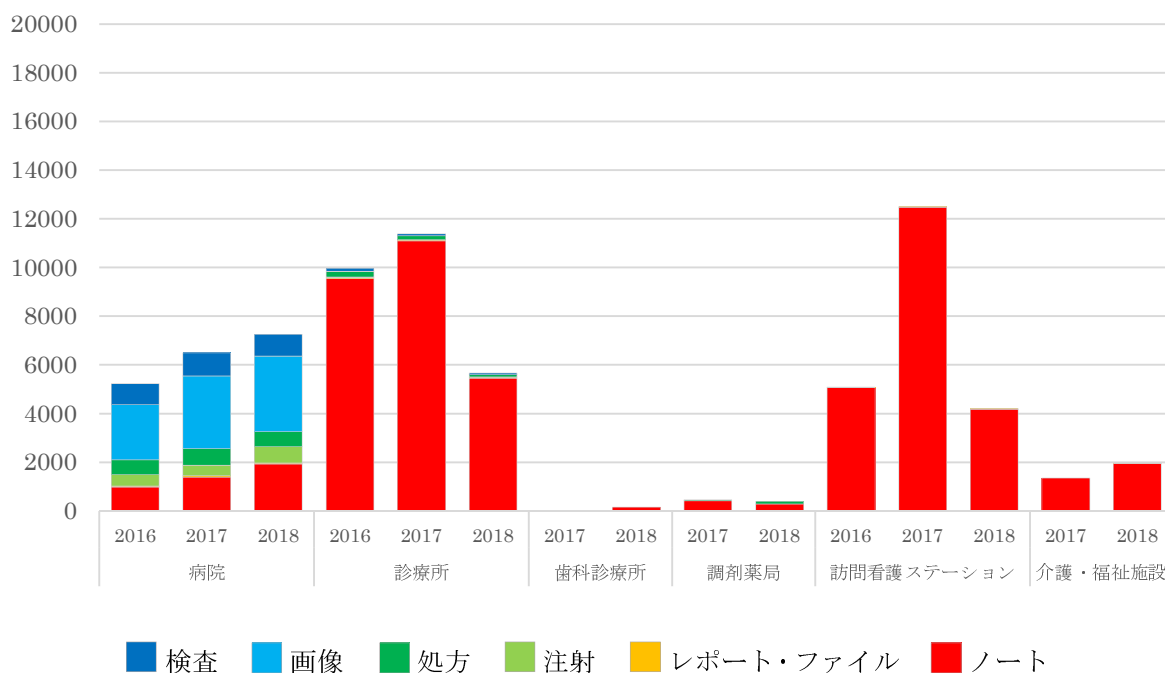


図5 診療所の参照先・参照項目

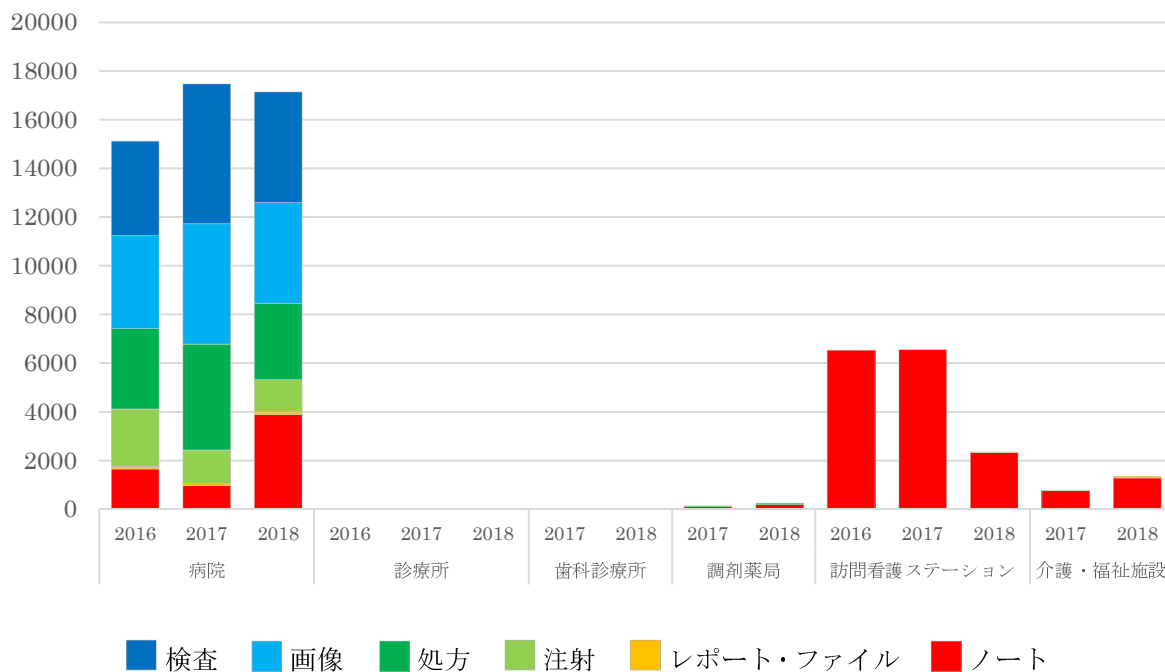


図 6 歯科診療所の参照先・参照項目

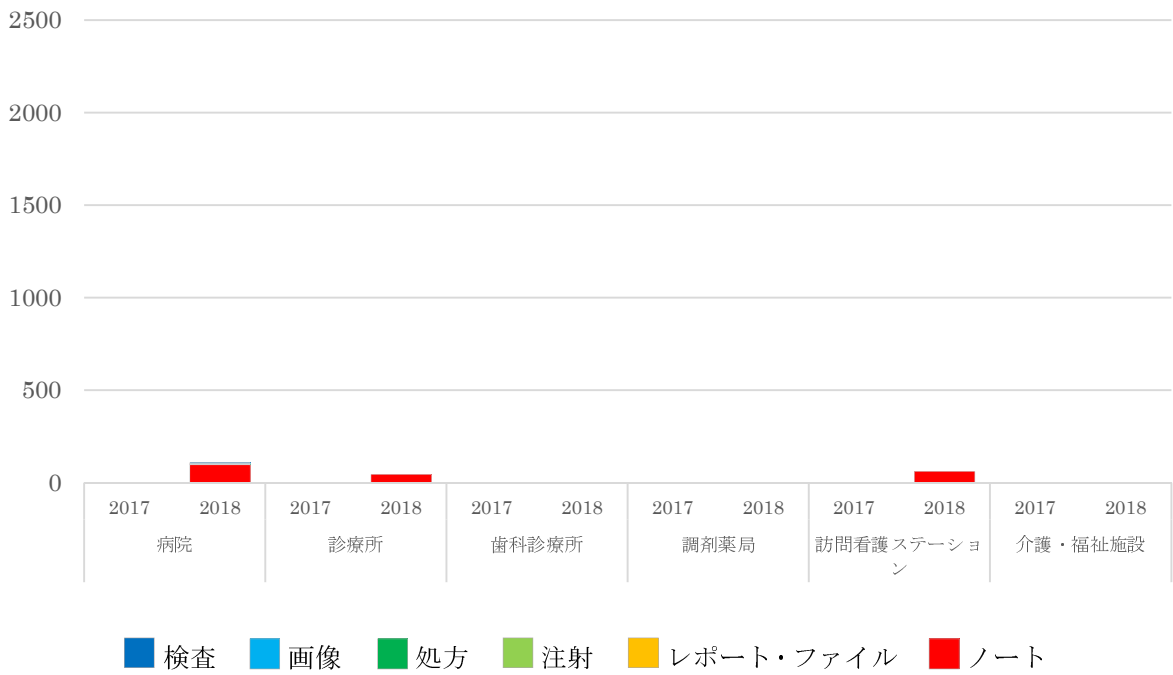


図 7 調剤薬局の参照先・参照項目

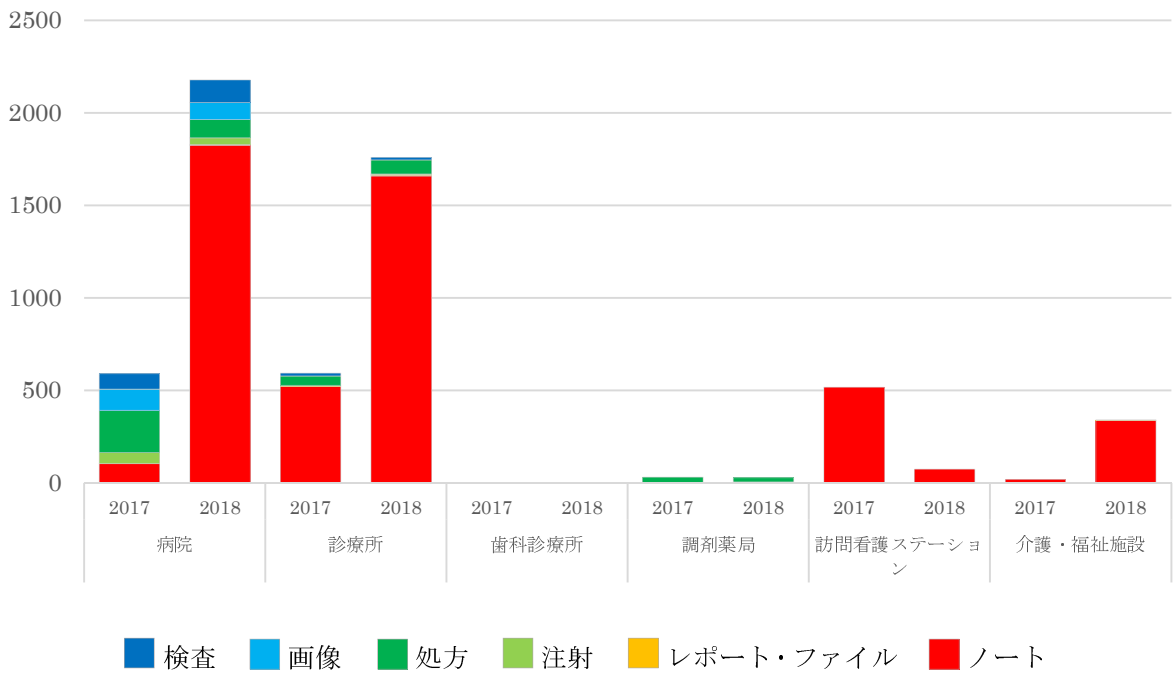


図8 訪問看護ステーションの参照先・参照項目

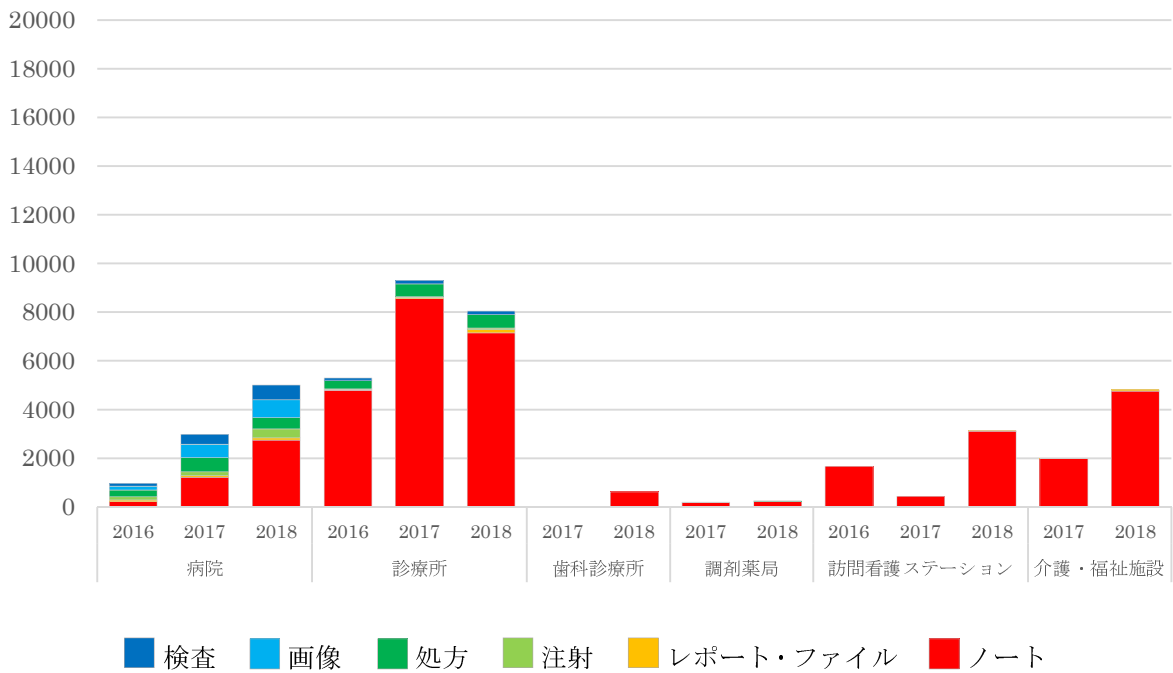
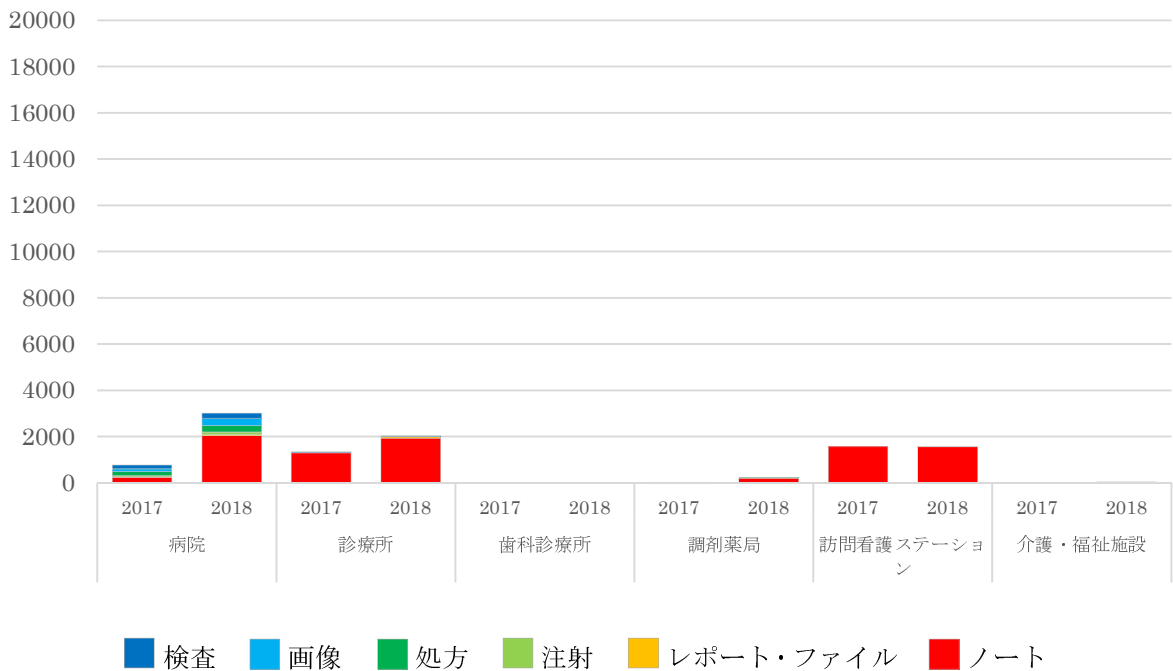


図9 介護・福祉施設の参照先・参照項目



## アクセスログの解析結果

### (1) アクセス数の年次推移

2014年に開催された「飯田下伊那診療情報連携システム[ism-Link] ID-Link 勉強会」を契機にアクセス数は増加傾向である※3。

施設別にみると、特に訪問看護ステーションでの利用が増えており、介護・福祉施設でも利用が始まっている（図1）。

2017年に南信州在宅医療・介護連携推進協議会において多職種の参加が承認されことにより、それまではアクセスの60%以上が医師であったが、2018年は医師以外の職種の利用が60%となり、ism-Linkの利用が多職種に広がってきている（図2）。

項目別ではノートの参照が約70%を占めているが、2015年以降にアクセス件数が増えてもその割合はほとんど変化しておらず、医療情報（検査・画像・処方等）の参照も増えてきていることがわかる（図3）。

### (2) 施設別のアクセス状況

病院のアクセスの主体は診療所と訪問看護ステーションのノートで、ism-Linkが病診連携の一助となっていることがわかる。一方、病院が他の病院を参照することも少しずつ増えてきている。画像参照が中心であるが、ノートの参照も増加傾向であり、病病連携でism-Linkを活用する場面が増えてきている（図4）。

診療所では主に病院の医療情報の参照に利用され、訪問看護ステーションとのコミュニケーションツールとしても使われている。診療所の医療情報が参照できないためか、診診連携にはism-Linkは活用されていない（図5）。

一部の歯科診療所でism-Linkが使われ始め（図6）、調剤薬局でも病院と診療所のノートを参照するようになってきた（図7）。

訪問看護ステーションは診療所との連携での利用が主体であるが、病院の医療情報とノートを参照することも増えてきている。介護・福祉施設のノートの参照も増加傾向で、ケアマネージャーとのコミュニケーションツールとしても利用が進んでいる（図8）。

介護・福祉施設でもism-Linkが使われ始めた。さらに職種別の解析を行うとケアマネージャーの利用が主体（アクセス数の約85%）であるが、施設の嘱託医も利用する（約10%）ようになっている（図9）。

※3 2018年は前年に比し総アクセス数が減少している。これは「病院における診療所と訪問看護ステーションのノートの参照」および「診療所での訪問看護ステーションのノートの参照」が減ったことによる。その原因は不明であるが、2018年は病院と診療所、訪問看護ステーションが連携するような在宅患者が少なかったのかもしれない。